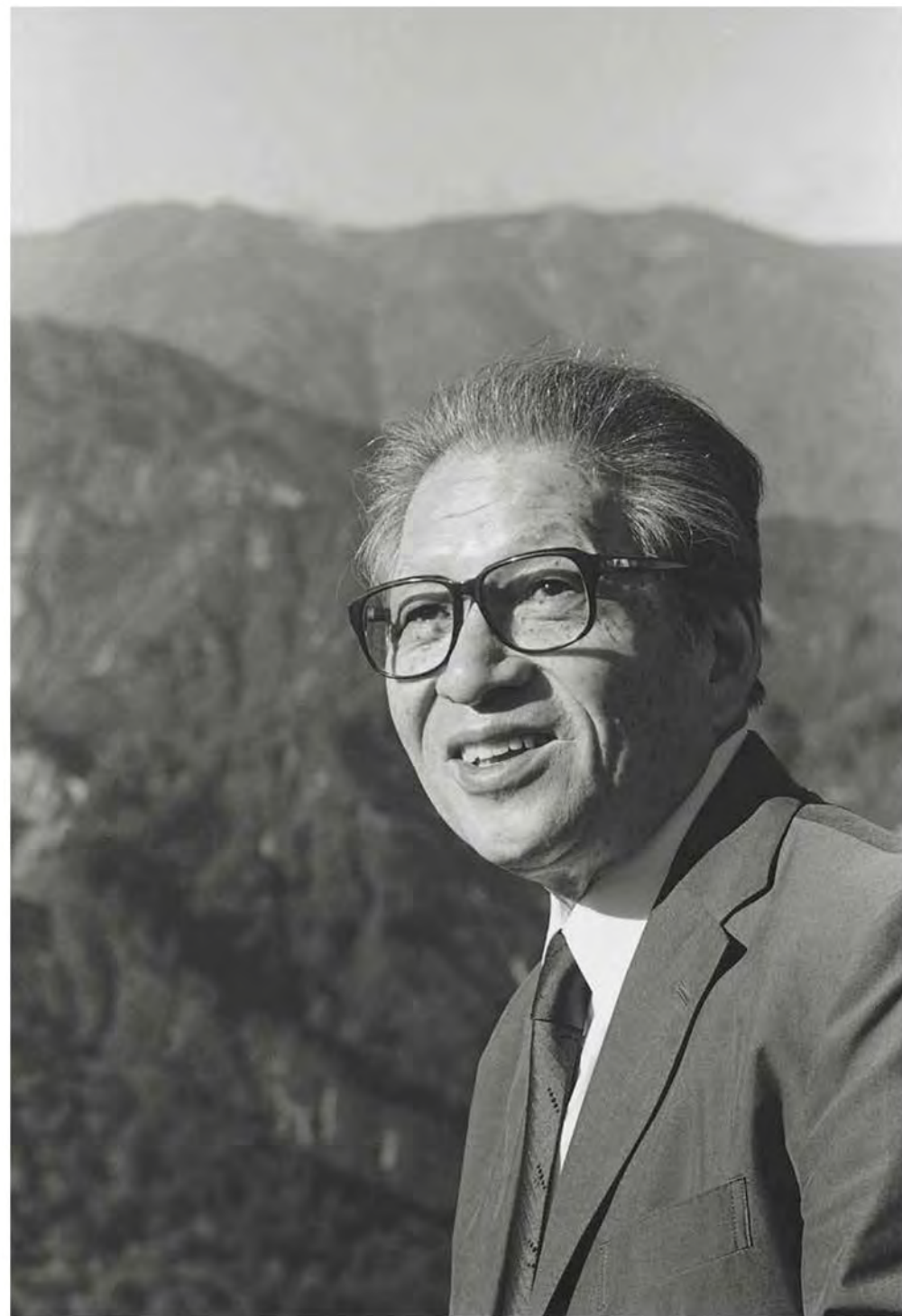


山形を愛し
ともに生きた
建築家 本間利雄





小国町玉川集落

「山と家」

内藤 廣（建築家、東京大学名誉教授）

本間との出会い

本間利雄（あえて本稿ではこう書く。普段は、二十歳年上の敬愛する建築家として、本間さん、と呼んでいる）というのは不思議な人だ。初めて紹介された日のことを今でも覚えている。1994年、その前年に幾つかの賞をいただいたこともあって講演会が殺到していた。毎週のように講演があり、体力的にも限界が来ていた。もともと人前で話しをするのは得意な方ではなかったから、似合わぬことはどこかで止めようと思っていた。自分の考えていることを語るより、設計に精を出すべきだった。大手町のホールで規模の大きな講演会が催された時、かねてより決意していたことだったが、この場で、もうこれではらくは講演を止める、と宣言をした。そういう経緯もあって、この日は記憶に残っている。終わった後の控え室に、いかにも仕立ての良いスーツ姿の年輩の紳士が訪ねてきた。本間だった。温厚な物腰、会話の中で笑顔を絶やさなかった。私のような若輩者の講演を一人の聴衆として、本間のような人が聞いてくれていたことに恐縮するばかりで、何を話したかは覚えていない。その時、わたしの身の処し方を、本間は心から喜んでくれているように感じた。優しい目の奥で、作り続けなければダメなんだよ、と書かれているような気がした。

それまで私が聞いていた本間の風評は、それほど肯定的なものではなかった。私が耳にしたのは、山形での本間はその存在があまりに大きすぎ、大きな計画にはどれも本間が関与している、という嫉妬に似た建築家たちのうわさ話だった。今になれば分かるが、これはバイオニアの宿命みたいなものだ。村社会的なこの国では、何か踏み込んでやろうとすれば、あれこれ言われることを覚悟しなければならない。地方ならなおのことだ。土木の世界でのデザインは、まだ緒に付いたばかりだが、そのバイオニアの一人である篠原修も、似たような噂をたてられることがしばしばある。私は、篠原とその状況を分け合っているからよく分かる。

本間の第一印象は、そうした風評とはかけ離れたものだった。どこをどうたぐっても、本間の顔からは山形の巨人を見い出すことは出来なかった。

地方ということ

地方で仕事をする、というのはどういうことなのだろう。私は東京を根拠にして活動しているが、ほとんどの仕事は東京の外、そう呼んでいいのかどうか分からないけれど、地方の場合が多い。上方に対して地方、いやな言葉だがそれ以外の呼称がないので、これを肯定的な意味で使いたい。聖なるもの、無垢なるものは、上にはなく地にあるという意味でこの言葉を捉えたい。

地方の実情と直に接する機会は多い方だが、それでもその場所で生活をし、設計をしている人の実感からは遠いと思う。多くの地方都市の建築家たちの現実とは、東京でのそれとはずいぶん違うはずだ。大学の同級生の何人かは地方都市で設計事務所をやっているが、工務店の確認申請の代顧客業務を生業の中心としていたりして、およそ格好のいい建築家像からはかけ離れていることがほとんどだ。東京でも名前が知られている地方都市の建築家、宮本忠長、山本長水、故山本忠司、故松村正隆、そうした人達は抜きん出た存在として特別だったのだと思うが、彼等はどのような思いで日々の仕事に取り組んでいたのだろう。本間利雄もその一人であることは間違いない。

何年前か、東北芸術工科大学で講演を頼まれた。学生たちとの懇親会に出て、早々に仙台行きの最終電車で飛び乗った。その電車でさきほどまでの懇親会で話をしていた一群の若者達の一人である女子学生が乗ってきた。仙台までの道中も退屈だったので、その学生と話をすることにした。講演で話した内容に対する質問から、いつしか会話は将来のことに移っていった。みんなどんなところに就職するのか、どういう仕事をしていきたいのか、というようなことだ。講演では、学生に対して理想を語り、世の中がどう変わっていくのか、建築がどうなっていくのかを語った。しかし、車中での会話を通して、自分がいかに外的な講演をしたかを恥じた。大学を出たからといって、建築家になるための修行をするというよりは、工務店やプレハブメーカーに勤める者がほとんどだという。若者達が理想を抱くには、地方では現実とは厳しすぎる壁として立ちちはだかっている。東京の人間が思い浮かべることが可能な範囲からはかけ離れたところにある。本間は、その厳しい壁を独りで登ってきたのだ。学生の話聞きながら思い浮かべたのは、本間の温厚な人柄と、その背後にあったであろう壮絶な戦いのことだった。

原風景

これまでの本間の仕事を振り返って、その全貌を論ずるのは不可能に近い。1962年に事務所を開設してから、手掛けた仕事は2000件に及ぶ。膨大な作品群を前に、どう論ずればよいのか、しばしば途方に暮れる。あらためて設計された建物のリストを見してみる。不思議なことに、幾つかのエボックはあるものの、スタイルは千変万化してとらえ所がない。しかし、どの建物にも本間独特のスケール感や温か味のようなものが色濃く現れているので、建物が醸し出している雰囲気は大きく変わら